

関係各位

科学技術振興機構(JST) 社会技術研究開発センター(RISTEX)
が推進する社会技術研究開発事業
2023年度新規採択プロジェクトについて

2023年10月25日

大磯地方創生事業推進コンソーシアム
[略称：大磯コンソ]

(事務局：Japa日本専門家活動協会)



Confidential

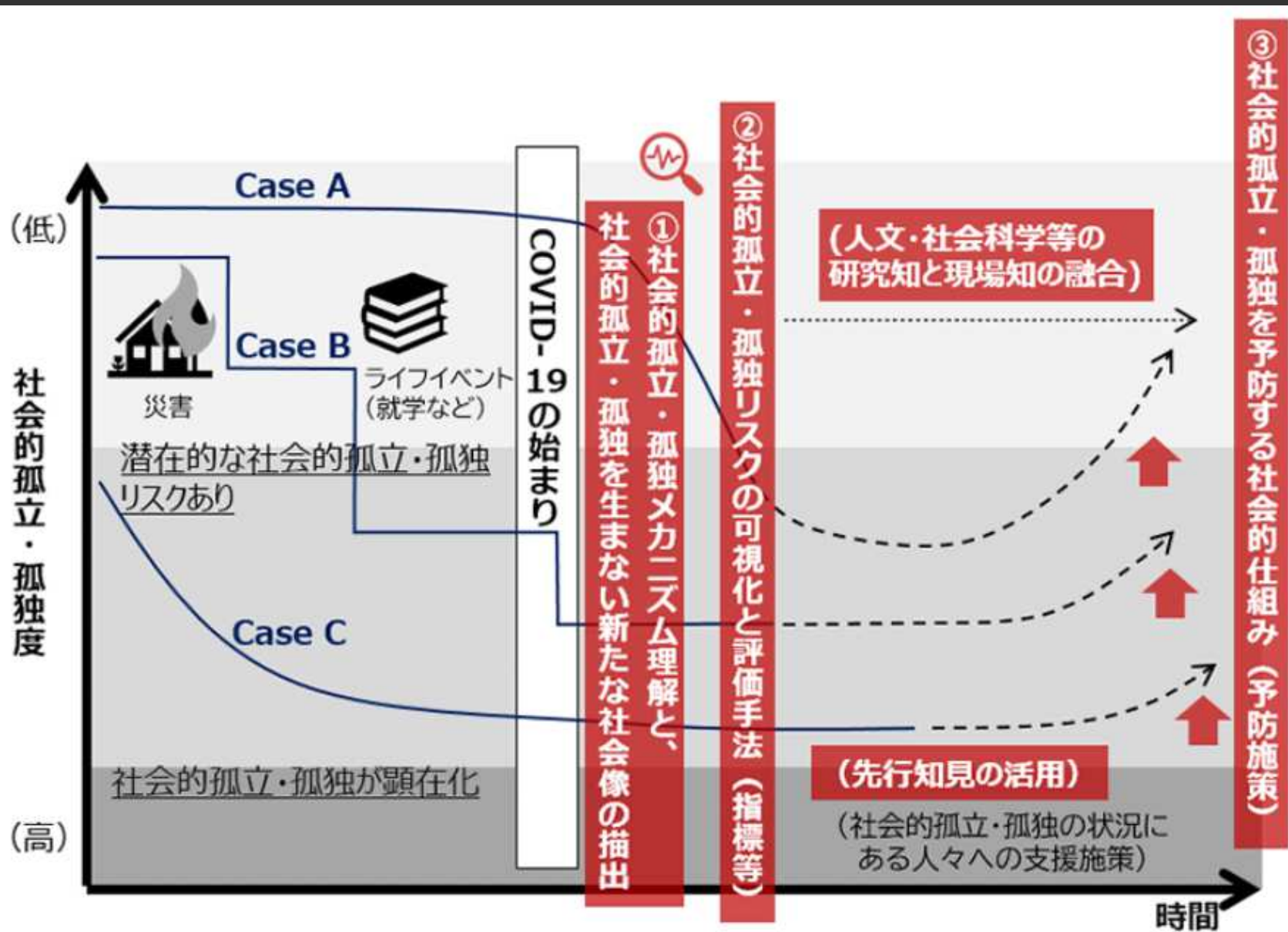
公募概要

- 社会技術研究開発は、現存する社会問題の解決や将来起こり得る社会問題への対処などを通して、新たな社会的・公共的価値の創出を目指す事業です。社会問題に関係するさまざまな関与者と研究者が協働するためのネットワークを構築し、競争的環境下で自然科学と人文・社会科学の知識を活用した研究開発を推進します。
- 公募プログラム
 1. SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）
応募数：34件 → 採択数：研究開発プロジェクト 3件
 2. 科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題(ELSI)への包括的实践 研究開発プログラム
応募数：38件 → 採択数：研究開発プロジェクト 3件、プロジェクト企画調査 3件
 3. SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（シナリオ創出フェーズ・ソリューション創出フェーズ）
応募数：69件 → シナリオ創出フェーズ 3件、ソリューション創出フェーズ 3件
- 募集期間：2023年4月6日（木）～6月7日（水）正午
- 募集締め切り後、プログラム総括、プログラム総括補佐およびプログラムアドバイザーが書類選考と面接選考による事前評価を実施し、採択プロジェクトを決定

プログラムの目標

【審査ポイント】

今回の公募において、社会的孤立・孤独を生まない社会的仕組みを創るといふ、抜本的な予防としての一次予防（中長期的にはゼロ次予防に向かうものとして）を強調しました。社会的孤立・孤独の個人的なリスクのみならず、社会の集合的な帰結に対する取り組みや、世代や属性に共通する要因に着目した、横断的なアプローチも重視しました。



研究開発対象

- ① **社会的孤立・孤独メカニズム理解と、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出**
 - ・ 人や集団の行動、心理、社会的背景の検証から、どのようなメカニズムによって社会的孤立・孤独が生じるのか、社会的孤立・孤独の状況にある人々の視点も考慮した社会の在り方を分析します。その結果を基に、予防すべき社会的孤立・孤独を明確にするとともに、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像を描出します。
- ② **社会的孤立・孤独リスクの可視化と評価手法（指標など）の開発**
 - ・ ①で描いた社会像の実現に向け、まず人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクを早期にとらえるための可視化や評価手法（指標など）を研究開発します。
- ③ **社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み**
 - ・ 社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み（予防施策）を開発し、②で開発した社会的孤立・孤独リスクの可視化・評価手法（指標など）も活用した評価・実証を、国内の特定地域や、学校、職場、コミュニティーなどを対象に行います。

評価者

	氏名	所属・役職
プログラム総括	浦 光博	追手門学院大学 教授／広島大学 名誉教授
プログラム アドバイザー	有末 賢	亜細亜大学 都市創造学部 教授
	石井 光太	作家
	稲葉 陽二	元 日本大学 法学部 教授
	宇佐川 邦子	(株)リクルート ジョブズリサーチセンター センター長
	岸 恵美子	東邦大学 大学院看護学研究科 研究科長／教授
	工藤 啓	認定特定非営利活動法人育て上げネット 理事長
	佐藤 嘉倫	京都先端科学大学 人文学部 学部長、教授
	平田 オリザ	芸術文化観光専門職大学 学長
	藤原 佳典	東京都健康長寿医療センター研究所 副所長
	遊間 和子	(株)国際社会経済研究所 調査研究部 主幹研究員

2023年度 公募申請プロセスと結果

1. SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築） **3件**
2. 募集期間：2023年4月6日（木）～6月7日（水）正午 ※ 6/7 11:00提出
3. 応募数：34件 → 面接数：10件 → 採択数：研究開発プロジェクト 3件
※ 8/7 第一次面談、8/25 総括面談 → 9/29 採択結果プレス発表
4. 研究開発期間：2023年10月1日から2027年3月31日まで（3年6ヶ月間）
5. 研究開発費：1,900万円/年（直接経費）程度上限

課題名	研究代表者
孤立・孤独予防に資する近隣社会環境の多様性の可視化による戦略的プレイスメイキング	内平 隆之 (兵庫県立大学 地域創造機構 教授)
AYA世代がん患者の孤立・孤独を先制的に一次予防するフィジカル空間とサイバー空間を融合させたネットワーク介入の開発	藤森 麻衣子 (国立がん研究センター がん対策研究所 サバイバーシップ研究部 室長)
サービス・モビリティと多形態コミュニティの繋がりによる社会的孤立・孤独予防モデル	米澤 拓郎 (名古屋大学 大学院工学研究科 准教授)

新規採択プロジェクト概要(1/2)

概要

- 多様性への理解が進み、画一的な価値観を強いられない社会の実現が目指される一方で、1) 少子高齢化に伴う地方交通網の衰退による**物理空間の移動性の低下**と、2) 情報過多社会ゆえの、フィルターバブル（好みの情報が自動選別され、似た意見や関心に狭まる現象）と選択的接触の影響により、個人の興味・思考が固定化されるという**情報空間の移動性の低下**が懸念される。近年ではメタバースなど、物理的な移動の必要がない新たなコミュニティの形態も期待されるが、そこへの接触機会や興味がなければ、人々が頼れる居場所を増やすことは難しい。**少数に限られたコミュニティにのみ依存し、そこに留まってしまえば、誰しも潜在的に社会的孤立・孤独の予備軍であるとも考えられる。**
- 本プロジェクトではこれらの問題に対し、**情報技術やモビリティ技術**をツールとして活用し、**時間・空間的な制約に縛られず、偶発的な出会いと愛着を誘引する孤立・孤独を生まない新たな社会像を描き、その実現を目指す。**

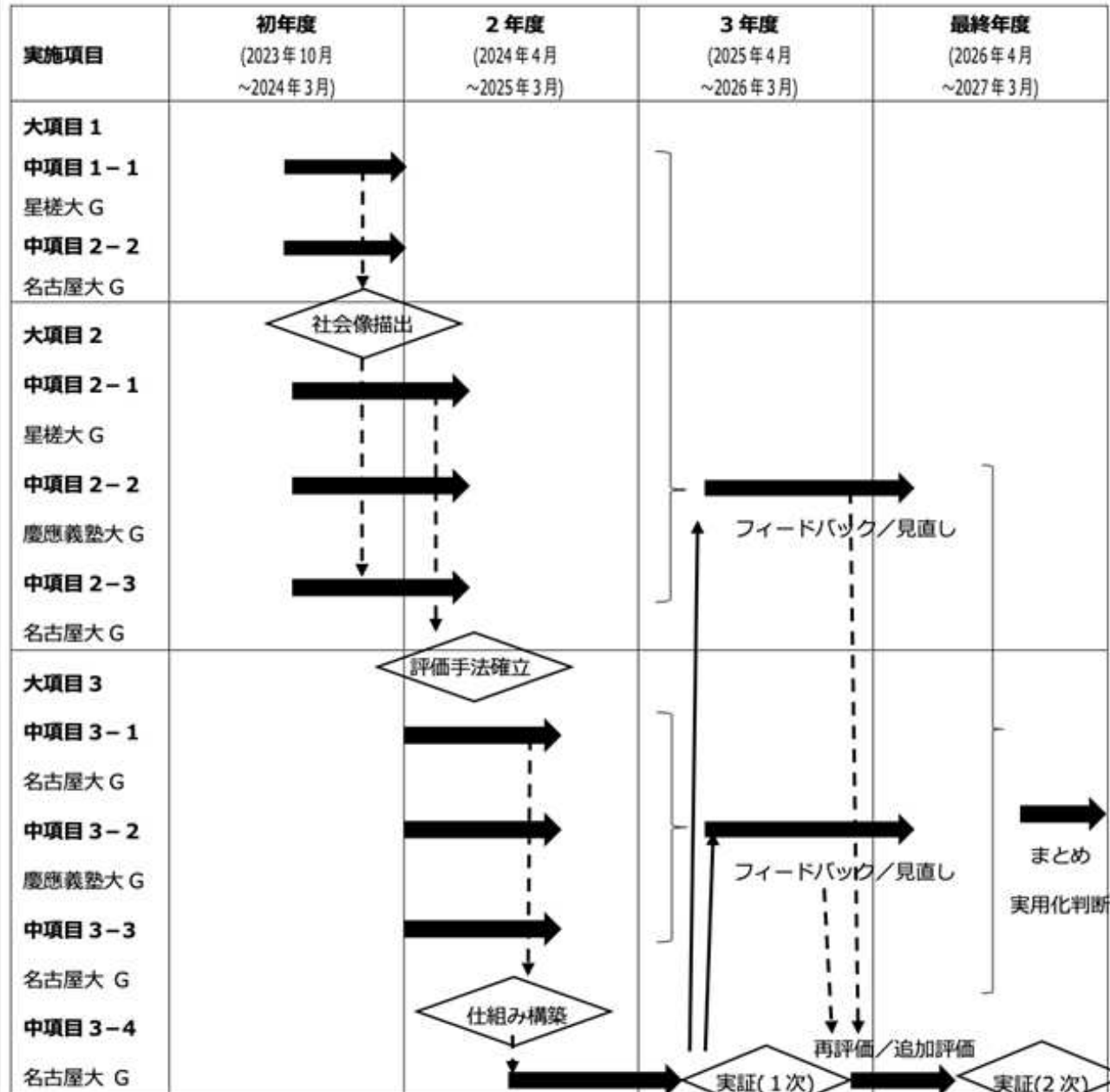
研究開発への参画・協力機関

- 名古屋大学
 - 東京大学
 - 慶應義塾大学
- [協力機関]
- インターネット I T S 協議会
 - 大磯地方創生事業推進コンソーシアム
 - 神奈川県大磯町
 - 星槎大学
 - 慶應義塾大学 S F C 研究所 地域 I o T
 - 情報力研究コンソーシアム
 - 慶應義塾大学 S F C 研究所 健康情報コンソーシアム
 - T a o H a u s など

新規採択プロジェクト概要（2/2）

概要	研究開発への参画・協力機関
<ul style="list-style-type: none">■ まず、孤立・孤独のメカニズム理解として、新たな情報やコミュニティに対する人々の接触機会および参与姿勢を主観・客観的なデータの収集・分析により測り、孤立・孤独感尺度との関係性を明らかにするとともに、その孤立・孤独のリスク指標化と可視化を試みる。さらにこの理解に基づき、偶発的な出会いと愛着を誘引するため、「ポータル」としてオンライン・オフラインの多形態のコミュニティへと接続することが可能な1) 地域の住民が集える「場」と、2) 地域を巡るサービス・モビリティ（移動販売車、移動図書館、移動健診車など）を活用した孤立・孤独予防モデルを構築し、大磯町において実証を行う。■ 本プロジェクトを通して、「多様なつながりを絶えず増やしていくことが、個人の人生や地域のレジリエンス向上に必要である」という意識を住民、企業、行政、専門家、支援団体など全員が共有し、それを支援することで、地域全体に社会的孤立・孤独の一次予防的機能を内包することを図る。	

研究開発の主なスケジュール



採択時のコメント(課題) 1/3

- 仮想空間と現実空間それぞれにおけるコミュニティをつなげ、フィルタバブルを除去しつつ個人間の関係流動性を高め、かつ「場」と「移動型サービス」を活用したハイブリッドな共生インタラクション基盤を醸成するという試みはオリジナリティがあると考えます。また、特定の層ではなく、非都市部の多様な住民を対象として、接触情報及び興味の質・量と孤立・孤独リスクとの関係性分析と可視化を行うことは、一次予防からさらにはゼロ次予防まで視野に入った提案であり、本プログラム目標への貢献、意義・ビジョンともに評価できます。文理、産官学と多様な研究者が参画しており、実施体制も整備されています。
- 一方、大磯町という限定的な地域での試みをどのように他地域に展開していくのか、「つながる」コミュニティをどのようにデザインしていくのか、単なる居場所であればすでに多くの自治体で工夫されているので、「サポートを交換」しあえる関係をどのように築くか、ビジョンが必ずしも明確ではありません。また、このような取り組みに興味関心を持たなかったり、アクセス手段に乏しかったりして孤立・孤独リスクが高いような人々をどのように包摂するのかについて、踏み込んだ検討が必要と思われます。

採択コメント 2/3

- 研究開発開始にあたっては、以下の点を検討の上、総括面談における議論を踏まえた計画の作成を求めます。
 - なぜ大磯町なのかについて、大磯町の特性を明らかにし、全国の自治体の中でどのような位置づけにあるのかを分析し、課題設定とのつながりを明確化してください。
 - 大磯町という限定的な地域での試みをどのように他地域に展開していくのか、住民の意識の高い難しい地域での試みが成功すれば横展開は容易であるとの説明がありましたが、さらに明確化して説得力をもって示してください。また、他の自治体との協働の可能性についても検討してください。
 - 名古屋大学の研究者が大磯町とどのように継続的に関わっていくのか、また、関わらないとすればプロジェクトの実施期間終了後、どのように取り組みの持続可能性を担保するのか、見通しを示してください。

採択コメント 3/3

- コミュニティ活動に積極的な参加者のデータだけにならないようにすることや、コミュニティから零れ落ちてしまっている層へのアプローチについて検討してください。
- 各種の調査結果をどのように活用して次のステップにつなげるのかを、さらに明確に示してください。
- 移動型サービスをモバイル、スマホだけでなく、自動車など、実際の交通機関との関係で人がどう動くか、コミュニティがどうつくられるかといった視点も取り入れることの可能性について検討してください。
- プライドが高いと思われる定年後男性の社会参加を促し、社会・コミュニティ活性化の支援者として活動してもらえる仕組みをつくるなど、ターゲットと取り組みのゴールの設定を絞ることについて検討してください。
- メタバース（仮想空間）を通じたサービスが実際にどれだけ使われるか、利用可能性や有効性について検討してください。

サービス・モビリティと多形態コミュニティの繋がりによる 社会的孤立・孤独予防モデル

修正

移動型サービス・モビリティによる 多形態のコミュニティとのゆるやかなつながりを実現する 孤立・孤独予防ネットワーク

米澤 拓郎 名古屋大学大学院工学研究科 准教授（代表提案者）

細田 満和子 星槎大学 共生科学部 教授（主たる実施者）

中澤 仁 慶應義塾大学 環境情報学部 教授（主たる実施者）

木村 聡 インターネットITS協議会（主たる実施者）

芝原 靖典 大磯地方創生事業推進コンソーシアム（主たる実施者）

社会的孤立・孤独を防ぐために：本研究提案における考え方

社会的孤立 = 社会（コミュニティ）とのつながりのない/少ない状態

社会的孤独 = ひとりぼっちと感じる精神的な状態



**新しいコミュニティへの出会いを
継続して支援することが必要**

「社会的孤立」の定義

- 一般に「孤立」は客観的概念で「社会（コミュニティ）とのつながりのない/少ない状態」といわれている。本研究では予防の観点から、孤独に陥る可能性のある状態を、「帰属するコミュニティの数が少なく限られ、増えない」状態、かつ、「帰属するコミュニティとのつながりが徐々に薄まっていく」状態であると、捉える。
- 前者を解消するには自身の思考・行動の枠を広げ、新たな出会いに対してオープンな姿勢を持つことが重要である。
- また、後者を解消するためには所属コミュニティとのコミュニケーション機会を保つことが重要である。
- つまり、自身と多様なコミュニティとがネットワークを形成すると捉えると、リンクを増やすことと、リンクがきれないようにする（太く保つ）こと、この両方が同時に満たされる状況が望ましいと考える。

「社会的孤立」の定義

- 一般に「孤独」は主観的概念で「ひとりぼっちと感じる精神的な状態」といわれている。当然、孤立は孤独を高める可能性が高いが、孤立していないことが、孤独ではないことの十分条件ではない。複数のコミュニティへ帰属していたとしても、それらが自身の悩みを相談できたり、不安をわかちあえるようなコミュニティでなければ、孤独は募っていく。
- すなわち、前述のつながりのネットワークを考えると、いまの自分が頼れるノード（コミュニティ）へのリンクがはられているか、が重要であるといえる。一方で、本研究では予防の観点から、孤立に陥る可能性のある状態を、「自分が帰属するコミュニティの多様性が低い」状態であると、捉える。
- なぜなら、人が孤独に陥る状況は、自身の予期せぬ状況変化や想像以上の環境変化（例：自然災害での被災、愛する人との死別、リストラ、妊娠・出産等）が引き金となる場合が珍しくない。予期せぬ様々な状況でも頼ることができる可能性高めるためには、多様なコミュニティとのつながりをつくっておくことが望ましいと考える。

社会背景：孤立・孤独を誘引する可能性

物理空間の 移動性低下

1) 高齢化・人口減少・過疎化に伴う移動機会の減少

- 人口減少による自治体の体力低下→ 地域公共交通網の衰退
- 2036年には3人に1人が高齢（65歳以上）→ **移動困難者の拡大**

情報空間の 移動性低下

2) 情報社会の負の影響

- フィルターバブル/エコーチェンバー等の影響による **興味・行動の固定化**

分断リスク

3) 社会的価値観の変化：多様性の集積

- 個性が尊重される社会へと成熟 → 多様性社会へ
- コミュニティ間の 相互理解の機会がなければ分断が進む
 - 自分は自分、相手は相手、のドライな関係に留まるリスク

**新たな出会いが生まれにくい社会へと
変容しようとしていないか？**

**社会的孤立・孤独
リスクの拡大**

本研究で目指す社会像

ビジョン

人々が帰属するコミュニティがゆるやかに増加していく社会の構築

「多様なつながりを絶えず増やしていくことが、個人の人生や地域のレジリエンス向上に必要である」という意識を住民、企業、行政、専門家、支援団体など全員が共有し、それを支援することで、地域全体に社会的孤独・孤立の一次予防的機能を内包する

ミッション

- ・個々人の興味・思考・行動の枠と社会的孤立・孤独との関係メカニズムの理解
- ・サービス・モビリティを通じたコミュニティ接続機能の実現
- ・実コミュニティと仮想コミュニティの連携プラットフォームの構築

研究実施体制: 情報×人×社会×モビリティ×地域等の専門家・実務家チーム

名古屋大学G (研究代表)



米澤拓郎

ヒューマンコンピュータ
インタラクション



浦野健太

データサイエンス



片山晋

対話AI

星槎大学G



細田満和子

社会学



堀越由紀子

社会福祉学

慶應義塾大学G



中澤仁

分散システム



杉本なおみ

コミュニケーション学



大越匡

Wellbeing 計算機科学

インターネットITS協議会G



木村聡

モビリティ・ITS技術
(日本電気)



鎌田卓

VR/MR/AR技術
(SpiralMind)



斎川一英

運輸・決済システム
(ヤマトシステム開発)

大磯コンソーシアムG



芝原靖典

社会システム・制度設計



古井昇空

僧侶・寺務
(宗教法人 東光院)



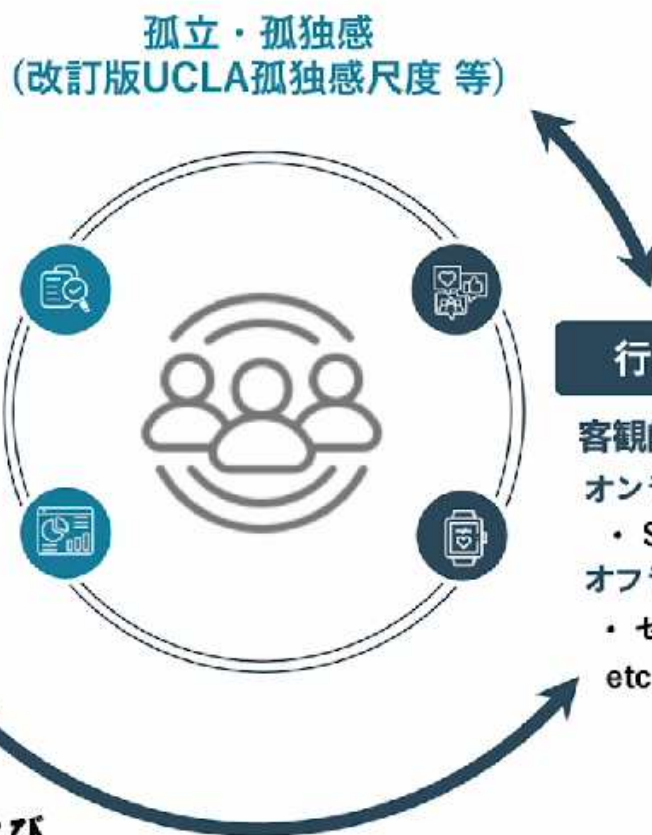
大久保浩正

シニアライフ
カウンセラー

協力機関

- ・ 神奈川県大磯町
- ・ 地域IoTと情報力コンソーシアム
- ・ 健康情報コンソーシアム
- ・ Tao Haus (認定フリースクール)

実施項目1: 社会的孤立・孤独メカニズム理解と新たな社会像描出
 実施項目2: 社会的孤立・孤独に陥るリスク可視化と評価手法の開発



星槎大学G

大規模アンケート調査

主観的な興味・思考・行動の枠

- ・ 対人指向性・対情報指向性
- ・ 選択的接触の自覚 etc.

Rakuten Insight



長期間
主観評価手法
構築



慶應義塾大学G

行動データ分析

客観的な興味・思考・行動の枠

- オンラインデータ
 - ・ SNSグラフ分析
- オフラインデータ
 - ・ センサ情報によるWellbeing計測 etc.



SNSデータ分析
(興味の偏り)

名古屋大学G

統合指標化

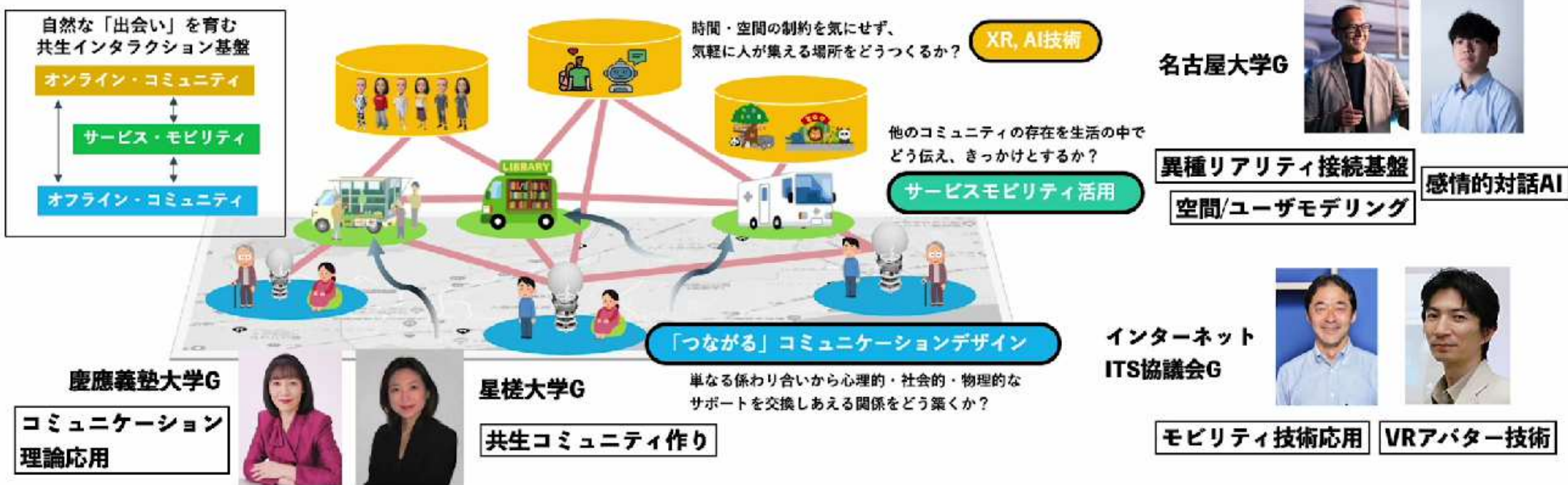
主観的データおよび
客観的データの統合分析による
リスク因子抽出 → 機械学習分析 → 可視化

自覚を促し、異なる興味に対する推薦サービス等との連携へ



スマート端末
センシング技術
AWAREを活用した
行動データ取得・分析
(行動の偏り)

実施項目3: 社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組みの構築



フィールド実証
神奈川県大磯町



まとめ

自然な出会いを育む「共生インタラクション基盤」

- 社会的孤独・孤立の新たなリスク因子の特定と指標化
 - 興味・行動の固定化への自覚を促し、異なる興味への誘導
- 多形態のコミュニティの場作りと、その存在の効果的な周知
 - サービス・モビリティを通じた他コミュニティの導線化を実現



神奈川県大磯町を実証フィールドとした実験

- 物理（東光院等）と仮想（メタバース等）コミュニティの構築
- 複数のサービス・モビリティ（移動健康診断バス等）の活用



学際的な専門家チームと、企業、行政との密接な連携による社会実装



社会的孤独・孤立の予防機能を備えた「つながる」社会へ